

和田傳全集

第四卷

和田傳全集 第4卷

定価 2,800 円

昭和五十三年六月二十五日 発行

著 者 和 田 傳

発 行 者 高 橋 芳 郎

(〒162)

東京都新宿区市谷船河原町十一

発 行 所 社 団 法 人 家 の 光 協 会

電 話 (260) 三 一 五 一 (大代表)

振 替 東 京 5 1 4 7 2 4

印 刷 三 松 堂 印 刷 株 式 会 社
製 本 寿 製 本 株 式 会 社

和田傳全集 第四卷

和田傳全集（第四卷） 目次

大日向村

5

女の財布

214

砂糖壺

230

背広と野良着

238

民
事

248

姑

273

その一郭

283

解説
天の民
茸
近隣
盗伐
抱鯉
嬬

赤星虎次郎
379 370 354 344 335 318

裝幀 舟橋菊男

題字 久住和代

大日向村

長野県南佐久郡大日向村は、千曲川の上支流、群馬県境十石峠から発する抜井川の溪流のほとりに、県道岩村田―万場線に沿うた峽間の底の村、東西二里二十四町の間八つのむらをならべ、夜の明けるにおそく、日の没するにはやく、とくに南に聳えたつ茂来山は濃い陰翳で全村を蔽い、ために冬など朝は九時にならねば太陽を仰ぐことができず、午後は三時にははやくも大上峠に日は沈み、昔から俗に半日村とさえ呼ばれている、大日向とは名ばかりの暗い日陰の村である。

両側に聳えたつ山々は、いずれも迫りつく急斜面をもって抜井川に駆け下り、斜面の果ては多くは殆んど川の堤をもって終わっているありさまである。そして川のほとりのわずかな平地に、無理無体に嵌め込んだみだいに耕地がつらなり、猫の額ほどといふ古来からの形容をそのままに、手笠の下に隠れてしまうほどの小さな田を並べている。或いは緩斜面をきりひらいて畑をつくり、県道の土堤にさえ桑を植えている。

八つのむらは川下から数えて下川原、本郷、平川原、水堀、矢沢、宿戸、古谷、馬返とならび、総戸数四百六戸、とくに奥のむら古谷、馬返となると耕地はまったくなく、わずかに山畑を家々のまわりにきりひらいている

に過ぎない。農家戸数三百三十六戸に対し、耕地四十九町八反、畑二百十六町歩、すなわち農家一戸あたりの耕作平均は田一反五畝、畑六反四畝、合わせて七反九畝という驚くべき数字が出てくるのである。

半日しか太陽を見ない谷底の村で、七反九畝の耕作をし、しかも土地は痩せ、寒冷のためまったくの一毛作しかできなく、それで生計が立とうとは常識では考えられない。人々はそのとぼしい畑や、或いは山々の斜面、県道の土堤にさえ植えこまれている桑の木が、ここでは途方もなくたくましく太り茂っているのに眼をとめるであろう。桑の木は或るところでは屢々母屋よりも高く、抱えつくほどの太さでのび茂っている。いかに蚕を飼うことに熱心であるかをそれは物語り、その必要の切実さをも物語っているのである。

人々はまた、東西に聳えたつ山々の林の広さに眼を奪われるに相違ない。そして、秋から春にかけて、絶えずその山壁の間からたちのぼる煙に眼をとめるであろう。炭を焼く煙なのだ。山林がまたここではいかに切実な生活資源であるかということをもそれは物語っているのである。家々の庇に、或いは納屋に、炭俵は積みあげられ、それは田場所の農家の土間に積みあげられている米俵ほどにもここでは大切な宝である。林野面積はここでは実に四千九百五十四町歩をつらねているのである。村有林は古谷、馬返むらから奥に、遠く群馬県境十石峠の頂までつらなり、林野面積の大部分、じつに三千六百四十八町歩を繰りひろげて、寺社有及び国有林を除き、私有林はわずか六百二十一町歩にしか過ぎない。しかもそのうち四百町歩は一人の豪家の所有である。

米にしては四カ月、陸稻大麦小麦を混ぜてもようやく五カ月の村内需要にしかあたらないうる耕地を補うために、村民はいずれも、残る八カ月すなわち年の三分の二の食糧を得るために山に入るのである。村有林に入るか、その一人の豪家所有の山に入るかして炭を焼くのだ。半ば農にして半ば炭焼きである。まったく鋤を持たず、蚕を飼わず、炭焼き專業の家は四十戸を算えている。

桑の木の大くたくましいのに驚いた人々は、しだいにこの村の奥に入るにつれ、つらなる山々の木の細さ、幼さには一層驚きの眼を瞪ることであろう。山々には樨、小檜をはじめ、いずれも薪炭材の雑木がぎっしりと茂っているが、いずれを見ても幼齡林ばかりであるということが驚くに堪えぬのだ。もはや十年は待たなければ伐れぬと思われる幼木ばかりが、殆んど全山を蔽うているありさまである。

昔はそうでなかった。松や杉、檜や樺、山毛櫸、榎などの一丈もめぐる大木が鬱蒼と昼も暗く繁っていた用材林であった。元禄年間信濃善光寺の堂宇再建の用材は多くこの村から伐り出され、いまま残る本堂中央の大円柱は、この村から寄進されたのである。いままこの村の古老たちは、鬱蒼と繁った嘗つての用材林が悉くあわれな薪炭林に変わりはててしまったことを嘆くのである。しかもその薪炭林さえ、いまだでは年々伐りつくされ、過伐に過伐を重ねた末に、皮をむかれたみたいに幼齡木ばかりになっている。

抜井川の堤に生えた胡桃の木ばかりが徒らにたくましくそびえている。胡桃が大きいのでなく、山々の木が小さいのである。寺社有の松林ばかりがわずかに常緑をたたえて尾根尾根に聳えていても、それを炭に焼くことはできない。抜井川の清冽な流れは尾根の翠巒を映して益々碧く、惜しげもなくころがっている奇巖巨石にあたって砕け散り、明媚な山峡の風光を現出しているが、それを誰が賞味するであろう。明媚な風光がかえってここではそぞろに悲しいのである。

二

昭和十一年の十二月、奥の古谷むらをはずれて抜井川の木橋を渡り、馬返むらの方へとほとぼ歩いて行く一人の老人、綿の入った木綿で着ぶくれた上にもう結構くたびれた羊羹色の短いインパネスをひっかけ、それにゴム

の半長靴を穿いた、で、私たちは、見るからにわびしかったが、それが村長由井啓之進であった。午後の三時になるかならぬの時刻であったが、すでに太陽は茂来山の向こうに落ち沈み、寒々との暗い陰翳が山々の斜面からたれこめて来ていた。由井啓之進は背中をまるめ、羽をふくらました病禽みたいに、そのとぼとぼと歩く姿は進むというよりは曳かれてでもいるように見える。

十月半ばにはすでに初霜が草々を枯らし、この月に入ってから雪はもう二、三度も降った。冬の厳寒には零下十度を越えることもころではめずらしくない。

病禽みたいに着ぶくれた由井村長はやがて馬返むらに入った。抜井川の岸に並んだ胡桃や栃の木立が寒々と裸でたちつくしている蔭に、急に駈け下りている山々の斜面を背に、夏ならば半ばは草に埋もれてしまうほどの家が、無造作にばら播かれたように八軒ほど数えられる。それが馬返むらである。

耕地はまったくなく、わずかに家々のまわりに桑が生え、その桑の木の方が家々の屋根よりも高く聳えている。田のない、畑さえ近くにはない農家である。板葺きの屋根の上に、重しに載せた石ばかり徒らににぎやかで、その重みが見る眼にも不安でならない。

由井啓之進は、最初の一軒の家の前で庭先から声をかけながら入った。

——おさいさんいたかえ？

見ると、母屋のわきの薪小屋みたいな建物の前で、炭俵を編んでいるのがそのおさいであった。

蓆の上で大あぐらをかき、ごみだらけになっておさいは炭俵を編んでいる。熊のような太い短い首の上で、顔もまた熊のように陰険で、獯猛で、その顔のいろは蕎麦殻みたいだ。

——精が出るいな。

由井村長は笑いかけた。

おさいは編む手を休めもせず、ただ黄色い歯だけで笑いをかえした。一俵編んで三錢にしかならない炭俵である。なまなかのことでこの手が休められるかと言っているみたいな手つきである。

ここで女たちは山の茅野の茅を刈り、それを家まで背負い下ろし、冬の仕事として炭俵を編むのが普通である。

——金吾さんは山ずらか？

——山ですに。

——山は何処だい？

——山でやすかい？

おさいはまた黄色い歯を出して笑い、すぐに答えなかった。

そんな場合女たちはすぐには答ええない。亭主に用があって来る者は、いいはなしで来るのではなかった。催促か督促かにきまっているのだ。家においても留守だと言う習慣がいつからかついでにしまっている。

——帰りは何時頃になるいな？

——遠えでやすよ。さようさ、晩の九時にはなりやしよ。

——毎晩そうかい？

——毎晩そうでやすに。

——いったい山は何処なんだな？

——山でやすかい？「おさいは、癡猛な顔にぎくしゃくの皺を寄せ、——遠えでやすよ。遠えで。何しろ、十

石峠の向こうでやすからねえ。

——十石峠の向こう？

由井啓之進は白い眉毛を毛虫みたいにくねらして眼を瞠った。

——十石峠のずっと先、二里も先だってやすからね。

おさいの言い方は、まるで、そこまですまから税金の督促にゃ行けぬえにと、せせら笑っているようであった。

——十石峠の向こう？」啓之進はまだ驚いていた。——群馬分だな、それじゃ？

——群馬分だつてはなしでやす。

県境の十石峠までここからでも一里半はある。これを越えて二里も行くとすれば片道三里半、往復七里のみちのりである。

——朝は四時に起きて行きやすよ。帰るのは晩の九時、子供の顔を見ることもできやせん。子供もお父ツァンの顔を見られやせんに。

由井村長は用向きをきり出す気持ちをとり忘れていた。そんなことを言い出したとて何になろう。

——息子さんも一緒かい？

——はあえ、松市も一緒でごわすよ。……息子の顔もここしばらく身しみて見たこともねえような訳でごわすに。

おさいは、熊のような顔に寂しい笑い皺を寄せた。松市は今年学校を出た十六歳の長男である。

由井村長はまず踵をかえしてから、申し訳に言うみたいな調子で、

——金吾さんが帰りなすつたらな、この暮れにゃ村税の方も何とかしてくれるようにな、きょうわしが来たと話しとくれや。

言うなり彼はもう歩き出していたのである。おさいの顔は見なかった。うしろからおさいは言葉を返して来なかった。聴こえたのは急にはげしくなった俵を編む音だけであった。

こんな催促が何になるのだと、またしても由井村長は自嘲するように独り言にしてぼやいた。村長がてくてく戸毎に督促をして歩くというさまも、ひろい世間に例がないだろうとまた彼はぼやいた。

八千八百円の村税割当額であったが、つもりつもった息納額は一万円をはるかに超えているのであった。しかも、その整理はまったく見透しも何もつかないでいる。

たかが一万円の息納だわいと、しかし、啓之進にはせせら笑いのようなものが先にたつのである。村では、総額四十万円余りの負債を、つまり全村四百六戸の一戸当たり平均にして千円を超えた負債を抱え込んで、どうにも身動きがつかなくなっているのだ。

一万円が何だとせせら笑う由井村長は、しかし、そのため、村政のまかないがつかず、教員の俸給も三カ月も遅れ、それさえ全額が支払えず、村会議員への費用支出の如きは数カ年分も怠り、もはやまったく、ちいもさ、ちもゆかなくなっていることを笑うわけにはゆかなかつた。

啓之進は相変わらず背中を丸め、次の家に入って行くことをやはり思いとどまらなかつた。

寡婦のふくは小^{もいさか}島の丸子の紡績へこの春から行っている娘からの手紙を読んでいた。

——どうだい？　ゼニ送って来るかい？

由井村長はいきなり声をかけて土間へ首を突ッ込んだ。

ふくははッと顔いろを変え、本能的にその手紙をふところへ押し込んでから、うろたえた表情をとりつくろう暇もなく向きなおった。

——何の何の！ゼニ送るところか、来月は送る、きつと送ると言い訳ばかりでなあ。ふんとにふんとに……。
——ええ男でもできたんじゃねえか？

啓之進は暇つぶしにでも来たみたいな口をきいてのっそり土間へ入った。

——まさかねえ」ふくはやっと安心した顔いろになった。——粹狂でおら紡績へやっつくじゃねえでやすからねえ。

ふくはふところへ押し込んだ手紙の中の七円の小為替の温みを心では感じながら、そらをつかった。

——どうだか知れたもんじゃねえ。おす多の阿魔ッ子はいい縹^{きんぎょ}織だし、それにおふくろさんみてえに度胸もいし、腕も達者だしするからな。

啓之進だとしてそのふところの手紙のものくらいは嗅ぎ分けていたのである。

それは嗅ぎ分けていたが、啓之進は承知してだまされていた。それに爪をたてるような口はどうしてもきけなかった。

——浅吉はやっばり油屋の山かい？

——はあえ、ずっと油屋へ入ってやすが、こいつもゼニの顔を見せてくれねえでごわすよ。ちらりと拝ましてもくれやせん」と笑っている。

——いいゼニとるだにな？

——飛んでもねえ。仕送り^{しおくり}と差し引けばいい月でとんとんでやすに。いつもいつも足を出すしまつでごわして……。

——それでもおふくろさんはええや。どっちかから餌は運んでくる。

——まあ村長さんは、飛んでもねえことを言いなさる。今月は暮れをどうしずかと、いまからお頭が病めるだに……油屋からは今月は仕送りも止められてあるし、借金がつもりつもってやすからね、その方へ繰り入れるつう知らせが来てやすに。

——おふくさんもへえお婆さんになったからなあ。

啓之進は益々無駄咄に來ているようなことを言った。おふくは若くて寡婦になり、油屋の番頭からはとくべつ大目に見て貰っているなどと、当時は噂もたつたのであった。

——婆あになったともね。こうなっちゃへえおしめえだ。村長さんも目こぼししておくんなさらねえ。え？
そうでしょう？

と、ふくは居直るときれいに先手を打ったのである。もう今年で六年も村税を払ったことがないということとは、寡婦の彼女は承知しているのであった。

——やられたな！」と、由井村長は益々背中を丸くして頭を掻いたが、事のついでだと言うように、——目こぼしはできねえな。浅吉が帰ったらな、そう言っといっておくれや。六年もぶつづけの怠納だしするからな。この暮れにや何とかしてくれねえと困るよ。まさか役場が夜逃げするわけにもゆかねえしな。

——夜逃げすればいいに。村長さん、おらも一緒に連れてっておくんなしよ。

——もうちっとお前さんが若かったらおれも考えるがな。

——まあ、ご自分の顔を鏡で見からお言いなしよ。ふんとに、呆れたもんだ。ねえ村長さん、おらも一緒に連れてっておくんなしよ。

と、ふくは、ふところのものに爪をたてようとしなこの人の良い年寄りに、甘えつくように笑いかけたので

ある。

啓之進はえへらえへら笑いながら暗い煙ったい土間からそとへ出た。うしろの山々の尾根で松の木が風に鳴り、その響きが道のほとりの柵の裸木を顫わせているようであった。しんしんと寒さが古いインバネスの生地を通り来た。

とほとほと由井村長はまた次の家へ入って行った。もはや村長の督促は、ただ顔を持って行ってほんの申し訳のようにそれに触れて来るといったものでしかなかった。

それを由井啓之進は、きょうで七日間もつづけていたのである。啓之進は一番川下のむら下川原の地主である。七日もつづけて、彼は自分のむらからその戸毎の督促をはじめ、本郷、平川原、水堀、矢沢、宿戸、古谷とのぼりつめて来、いまは最後のこの馬返むらまでやって来たのだ。

督促をして効果があるとは思っていなかった。はじめから効果を考えた仕事ではないのである。果たしてきょうでそれほどの日がたつのに、まだ一人として役場へ顔を出した者はなかった。

馬返の最後の家から道へ出た啓之進は、丸めた背中をのぼして伸びをするみたいに溜息を大きく吐いた。ふしぎとそれは安堵のような溜息であったが、やれやれと彼は思い、これで先ず仕事は終わったわいと、心も軽くなくなって出た溜息だったのである。啓之進は来た時よりも却って軽い足どりになって引き返しはじめたが、これから役場へ帰って早速辞表を書き、あすは東京へ出て行って浅川の武ちゃんのところへ坐り込むだと思いと、さすがに心もときめき、足も浮きたつのであった。三期十二年も通いつめた役場も村長の椅子ももうきょうかぎりおさらばじゃ。老骨に鞭打ち、倒れるまでの奉公はして来たのじゃと彼は思い、いまは最後に残されたたった一つの村への奉公は、浅川の武ちゃんを東京から引ッ張り戻してくることだと考えていた。